

# INFORMATION

## 十五年産小麦の赤かび病防除対策

### 一 赤かび病のチェックが厳しくなった理由

十四年産の小麦から赤かび病のチェックが厳しくなりました。赤かび病は穀類に発生する病害ですが、この赤かび病菌が出すかび毒(デオキシニバレノールという)が問題となっています。これに汚染されたものを食用や飼料に用いた場合、まれに嘔吐・下痢といった中毒症状を起すなど、人体や家畜への影響が指摘されています。

この問題に対し厚生労働省は、薬事・食品衛生審議会で検討し、健康危害を未然に防ぐため、食品衛生法第七条に基づく規格基準の設定が必要と発表しました。これに伴い規格基準設定の間、小麦に含有するデオキシニバレノールの暫定的な基準値を一・一ppmに定め、この値を超える小麦が市場に流通しないように方針を打ち出しました。

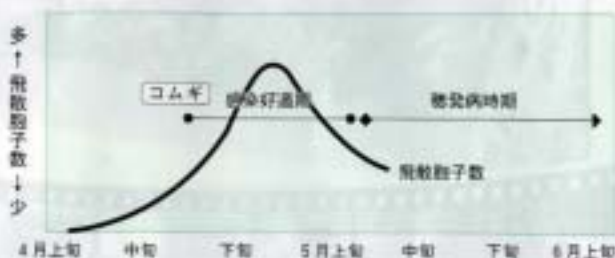
これを受け、十四年産小麦は、収穫時にJAの自主検査と、売り渡し時に国の指定機関へ委託して、デオキシニバレノールの検査を実施し、安全性の確保に努めました。検査結果については、基準値を超えるものは検出されませんでした。が、今後検出された場合、出荷・販売を断念しなければならぬ事態も想定されるため、十五年産の作付けは、赤かび病の防除を徹底していく必要があります。

### 二 赤かび病菌の生活の仕方

赤かび病は、子の菌類に属する一種のかびが原因で発生します。主として穂に発生しますが、葉・莖・わら及び幼苗にも発生します。

穂では乳熟期から発生し、穂の一部または全体が赤褐色となり、病斑部に桃色のかびが生えるのが特徴です。のちに病斑が拡大し、

黒色の小粒点が見られることもあります。病原菌は、被害種子や麦わら、稲刈株などに付着し、寄生して越冬します。越冬した病原菌は、翌春穂子を再形成し、これが飛散して感染します。種子伝染、土壌伝染することもあります。穂についていた胞子はそので発芽し、気孔や表皮などから侵入して発病します。発生条件は、開花期から乳熟期にかけて雨が多いことが発生の最大要因で、気温が二〇〜二七℃のときに特に感染しやすくなります。伝染源となる胞子の飛散は、降



図一 小麦赤かび病の発生消長

資料：埼玉農産総研・埼玉農病害虫防除所

表一 小麦赤かび病防除薬剤と使用法

薬剤名	有効成分	散布量 (1haあたり)	使用時期 (収穫前)	使用回数
トップジンM水和剤 *	1,000~1,500 (10%水懸液)		14日前	3回以内
トリブミン水和剤 *	1,000~2,000		14日前	3回以内
ベルコート水和剤	1,000~2,000	120~150g	21日前	2回以内
ストロビー707アブル *	2,000~3,000		14日前	3回以内
715スター707アブル *	2,000~3,000		7日前	3回以内

\*印は、うどんこ病にも登録があるので、同時防除が可能です。  
\* 登録に当たっては、使用基準を必ず守って下さい。

雨時または降雨後の曇天多湿時に多く行われ、飛散胞子数の多い時期が開花期から乳熟期に当ると感染の危険は増し、開花からほぼ十日間が最も感染しやすい時期とされています。

### 三 防除対策

#### ○耕種的防除

- ・ 種子は無病ほ場から採種する。
- ・ 窒素肥料の多量追肥は避ける。
- ・ ベークラーで梱包した麦わらは、野積みにならず早期に発酵堆肥化する。

#### ○薬剤防除

- ・ 表一に示す薬剤のいずれかを、開花期から乳熟期にかけて散布する。
- ・ 発病前〜発病初期の防除効果が高いので、早期散布を行う。
- ・ 農産物の安全・安心に対する関心が高まっています。また、埼玉県、特に県北部は小麦の優良産地としてメーカーなどに高い評価を受けています。十五年産に向けて安全・安心・良品質な麦づくりを心掛けましょう。